

## 巻 頭 言

## 第 52 回日本呼吸器学会学術講演会の楽しみ方

西村 正治

平成 24 年の年頭にあたり一言ご挨拶申し上げます。昨年度はご承知のように 3 月に東日本大震災という想像を絶する大災害とそれに伴う原発事故があり、呼吸器学会学術講演会は縮小開催を余儀なくされました。この場を借りて、改めて大震災で亡くなった多くの方々に対する哀悼の意を表するとともに、今なお困難な生活を強いられている被災者の皆様に心からお見舞い申し上げます。

さて、今年の第 52 回日本呼吸器学会学術講演会は 4 月 20 日（金）～22 日（日）の 3 日間、神戸コンベンションセンターにおいて開催を予定しております。学会のメインテーマには、「呼吸器病学－過去・現在、そして未来への展望」を掲げました。平凡なテーマではありますが、そこに医学・医療の発展の原点があると私は信じるからです。基調講演にはそのテーマにもっとも相応しい研究者の 1 人でいらっしゃる James C. Hogg 先生をお招きします。Hogg 先生は言うまでもなく COPD における small airway disease の重要性を今から 40 年以上前に NEJM 誌に発表し、今なお現役で新しい研究手法を次々に導入して革新的な研究を続けていらっしゃる方です。研究の継続性という意味でも、研究の革新性という意味でも COPD 研究においては紛れもなく世界を代表する 1 人です。招請講演にもその領域の歴史と最先端の学問を語るに最も相応しい先生をお招きします。Peter Barnes 先生は COPD の病態からみた新規治療薬の展望について、Bruce E. Johnson 先生は肺癌の分子標的治療の現状と未来についてご講演されます。さらに、本学会員の中

からも各分野を代表する先生方に特別講演をお願い致しました。気管支喘息－大田健先生、間質性肺炎－杉山幸比古先生、呼吸器感染症－河野茂先生、肺循環領域－中西宣文先生、肺移植－伊達洋至先生の方々です。これらの専門領域とご講演者名を聞いただけで、学会のテーマの意図するところを皆様にご理解いただけるのではないのでしょうか。

さて、学会のプログラムはほかにもシンポジウム、教育講演、ガイドラインセッション、特別報告など盛りだくさんです。例年通り、International Symposium, English Mini-Symposium も多数の著名な外国人が参加して開催されます。一般演題は、一会場のみで 3 日間連続で行われるミニシンポジウムを除いて、残りすべての演題をポスター発表とさせていただきます。ただし、ポスター発表は全演者に発表の機会を与え、原則、他のプログラムとは独立した時間枠で行いますので、多数の参加者と活発な討論が期待されます。また、会長特別シンポジウムとして「東日本大震災・大津波にともなう肺障害」と「放射線被ばく医療」を取り上げます。いずれも、昨年の大震災以来関心の高まっているテーマであり、とりわけ後者は原発事故に伴う問題ばかりではなく、CT 画像をはじめとする医療被曝の問題も併せて取り上げていただく予定です。

このほか、「息することは生きること！」と題するテーマの市民公開講座を企画しました。本間生夫先生による“息切れ”、飛田渉先生による“低酸素”のお話に引き続いて、冒険家である三浦雄一郎氏によるご講演を予定しております。三浦雄一郎氏は 75 歳でエベレスト登頂に成功し、近い将来に 80 歳での再挑戦を目指している方です。まさに“息切れ”と“低酸素”の極限状況における彼の挑戦と経験は聴衆を大いに勇

気づけてくれることでしょう。一般市民の聴衆ばかりではなく、日本呼吸器学会の会員の先生方にとっても楽しめる内容になるものと期待しています。

日本呼吸器学会のような大きな学会では、自分の専門領域のみならず、呼吸器病学の広い領域を一度に学ぶことが出来るのが魅力のひとつです。そのため、参加した皆様が様々な学会の楽しみ方が出来るようにプ

ログラムについては並行して行われる企画のバランスや基礎・臨床の組み合わせ等々などに最大限の工夫をするつもりです。

4月に神戸で皆様とお会いできますことを今から心待ちにしております。参加された方がどなたもご満足いただけるような学術講演会にしたいと心から祈念しております。